

# キャリア教育が及ぼす継続就労に対する学生の意識変化について

杉浦 礼子

高田短期大学キャリア育成学科

## 1. はじめに

成長戦略の柱の一つとして注目されてきた女性の活躍推進であるが、2014年10月、様々な状況に置かれた女性が、自らの希望を実現して輝くことにより最大の潜在力である「女性の力」を十分に発揮し、社会の活性化につなげることを目的に、首相を本部長とする「すべての女性が輝く社会づくり本部」が設置され、初会合において、「すべての女性が輝く政策パッケージ」が取りまとめられた。また、「女性活躍推進法案（女性の職業生活における活躍の推進に関する法律案）」が閣議決定され、301人以上の企業に対して、一般事業主行動計画の策定と厚生労働大臣への届け出を義務化した（300人以下の企業は努力義務）。計画書には、計画期間のほか、達成しようとする定量的目標、女性の活躍の推進に関する取組の内容、実施時期の4つの明記を義務付けている。行動計画策定に当たっては、女性の活躍に関する状況を把握し、改善すべき事情を分析した上で、その結果を勘案したものにするよう求めているほか、策定した行動計画を労働者に周知し公表しなければならないなど、高い実効性と成果を求めている。

「すべての女性が輝く政策パッケージ」で示された、女性の視点からみた課題と施策項目の具体的記述に、「キャリア教育や職業訓練機会の充実等、就職準備段階から、就職活動段階、就職後のキャリア形成に渡る総合的な対策を検討」とあるほか、「三重県まち・ひと・しごと創生総合戦略」においても、女子学生を中心とする長期的視野に立ったキャリア教育の必要性が議論され反映されたように、国や都道府県が積極的に旗を振り、女性の活躍推進・促進に力を入れている。

そのような中、高田短期大学キャリア育成学科は、学生に対するキャリア教育をどのように展開し確立すべきであるのかを明らかとするため、アンケート調査により、

- ① 既に開講しているキャリア教育関連科目の一つ、キャリアデザインⅠが学生の長期的視野に立ったキャリアデザインにどのような変化をもたらしているのか
- ② 身近なロールモデルである保護者の就労状況が学生の継続就労に対する意識に差異をもたらすかについて検証する。

## 2. 調査方法

高田短期大学は、専門科目のキャリア育成基幹科目に位置する分類項目の一つ「キャリア」に「キャリアデザインⅠ(1年生前期)」「キャリアデザインⅡ(1年生後期)」「キャリアガイダンス(1年生後期)」を修学科目としておき開講している。本稿におけるアンケート調査は、杉浦が高田短期大学において担当しているキャリア教育関連科目の中から、「キャリアデザインⅠ」を受講している学生を対象に実施し

た。なお、「キャリアデザインⅠ」の講義内容は、表1の通りである。

アンケート調査は以下の要領にて実施し、無記名で回答を得た。性別は、女子学生 57 サンプル、男子学生 11 サンプルであるが、女性の活躍推進および自身のキャリアデザインを実現するためには男女の区分けなくキャリア教育が必要であると考えことから、男子学生女子学生ともに調査対象とし、男子学生は、パートナーとなる女性に対して求めたい意識と読み替えて回答するように指導し実施した。

なお、本アンケートを実施するにあたり、口頭で調査の目的、倫理的配慮、成績等に反映するものではないことを伝えている。

- 実施時期 : 2015年7月30日(木)、キャリアデザインⅠの15講義目  
調査対象 : 高田短期大学キャリア育成学科1年生、キャリアデザインⅠ受講学生  
配布回収 : 紙面を直接配布・直接回収  
サンプル数 : 68 サンプル (女子学生 57 サンプル、男子学生 11 サンプル)  
\*留学生からも回答を得たが、本稿における分析データの対象からは除外した。

表1 キャリアデザインⅠの講義内容

1	オリエンテーション、高短キャンパスネットの使い方
2	キャリアインタビューの準備
3	キャリアとは、キャリアデザインとは
4	キャリアデザインにあたり知っておくべき社会環境
5	「生き方」を考える -結婚、出産について
6	「働き方」を考える -フリーター、ニート、早期離職について
7	社会が求める力とは
8	キャリアデザインの描き方<フレンテ・トーク>
9	自己分析について
10	アセスメントツールの使い方、適職診断
11	ライフキャリアとライフロールの理論
12	キャリアインタビュー 結果の共有 モデル①
13	キャリアインタビュー 結果の共有 モデル②
14	キャリアをデザインする
15	まとめ

### 3. 調査結果の概要および考察

#### (1) 調査結果の概要

アンケートで得たデータから、①既に関講しているキャリア教育関連科目の一つ、キャリアデザイン

I が学生の長期的視野に立ったキャリアデザインにどのような変化をもたらしているのか、②身近なロールモデルである保護者の就労状況が学生の継続就労に対する意識に差異をもたらすか、について考察する。

まず、一つ目の「既に開講しているキャリア教育関連科目の一つ、キャリアデザイン I が学生の長期的視野に立ったキャリアデザインにどのような変化をもたらしているのか」についてである。

「キャリアに対する意識が変わったか」に対しては、「あてはまる (34.3%、23 サンプル)」「どちらかといえばあてはまる (56.7%、38 サンプル)」で意識が変化した比率は 91.0%である。同様に、「キャリアデザインは大切だと思った」学生比率は、「あてはまる (65.7%、44 サンプル)」「どちらかといえばあてはまる (31.3%、21 サンプル)」で 97.0%と高い。さらに、「キャリアとは生涯にわたって築き、修正していくものだと思った」学生比率は、「あてはまる (49.3%、33 サンプル)」「どちらかといえばあてはまる (44.8%、30 サンプル)」で、94.0%の学生がキャリアを長期的視野で捉えて修正していく大切さを認識している (表 2 参照)。

図 1 は、質問「入学前のあなたの意識に最も近いものを教えてください」と「今のあなたの意識に最も近いものを教えてください」(ともに SA=単数回答)のカテゴリーを統一し、変化を可視化するために並べ示したものである。短期大学に入学する前は、「考えたことがなかった (35.3%、24 サンプル)」学生が最も多く、次いで「妊娠・出産を機に働くことをやめ、家庭に専念する (16.2%、11 サンプル)」、継続就労の意思を示す「結婚や妊娠、出産に関わらず、働き続ける」は、7.4% (5 サンプル) にとどまっている。

一方、表 1 で示したキャリアデザイン I の講義内容を受講してきた 15 講義目における時点での学生の意識は、「結婚や妊娠、出産に関わらず、働き続ける (32.4%、22 サンプル)」が最も多く、継続就労の意思を示す学生比率は短期大学に入学する前に対して 25 ポイント高まった。次に多いのが「妊娠・出産を機に働くことをやめ、落ち着いたら短時間勤務できる職場で働く」(29.4%、20 サンプル)であった。

なお、キャリアデザイン I の講義だけでなく成績評価の対象としているレポート作成において、自身の長期的・短期的視野に立ったキャリアデザインを考える機会を与えていることもあり、「考えたことがない」学生比率は 0%となった。

表 2 キャリアデザイン I 受講による意識の変化(抜粋)

	あてはまる	どちらかといえばあてはまる	どちらかといえばあてはまらない	あてはまらない
キャリアに対する意識が変わった	34.3	56.7	6.0	3.0
キャリアデザインは大切だと思った	65.7	31.3	3.0	0.0
キャリアとは生涯にわたって築き修正していくものだと思った	49.3	44.8	6.0	0.0

(%)

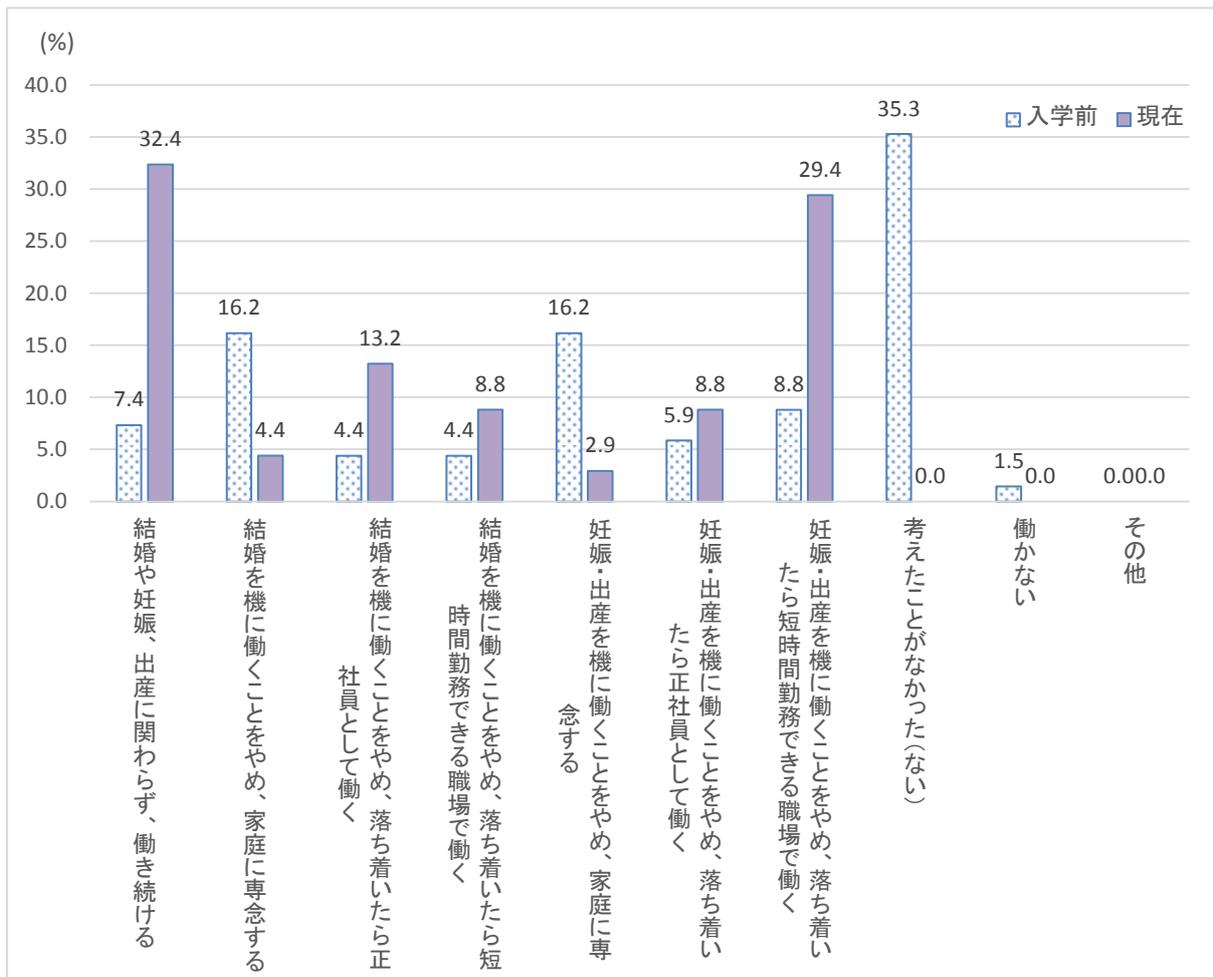


図1 あなたの意識に最も近いものを教えてください

次に二つ目の「身近なロールモデルである保護者の就労状況が学生の継続就労に対する意識に差異をもたらすか」についてである。

社会に出る前の学生にとって身近なロールモデルとなりえる対象に保護者がある。回答学生の保護者の生活については、表3の通りで、「共働き世帯(77.9%、53サンプル)」が最も多く、次いで「専業主婦(夫)がいる世帯(14.7%、10サンプル)」であり、雇用形態を問わず就労しているロールモデルが家庭内に存在している。専業主婦(夫)がいる世帯で生活している学生サンプル数は少ないが、ロールモデルとなりえる保護者の就労状況が、長期的キャリアの意識形成にどのような影響を与えるのかをみるために、保護者の就労状況とキャリアデザインIを受講する前である入学前の学生意識をクロス集計し、結果を表4で示した。

「結婚や妊娠、出産に関わらず、働き続ける」継続就労を入学前から意識していた学生は、保護者が共働き世帯である学生に限定される結果となった。長期的キャリアを「考えたことがなかった」学生は、共働き世帯の学生よりも専業主婦がいる世帯である学生に多くみられ、「働かない」と回答した学生は、専業主婦がいる世帯である学生に限定される結果となった。なお、回答学生が最も身近に感じている女

性は、「母親(94.1%、64 サンプル)」である。

表 3 保護者の就労状況

No.	カテゴリ	実数	%
1	共働きである	53	77.9
2	父親(あるいは母親)のいずれかが一人が就労している	15	22.1
3	専業主婦(夫)がいる	10	14.7
4	誰も就労していない	0	0.0
5	その他	1	1.5
	サンプル数(%ベース)	68	100

表 4 入学前のあなたの意識に最も近いものを教えてください×保護者の就労状況

		全体	結婚や妊娠、出産に関わらず、働き続ける	専念する	結婚を機に働くことをやめ、家庭に専念する	結婚を機に働くことをやめ、落ち着いた	結婚を機に働くことをやめ、落ち着いた	結婚を機に働くことをやめ、落ち着いた	妊娠・出産を機に働くことをやめ、家庭に専念する	妊娠・出産を機に働くことをやめ、落ち着いた	妊娠・出産を機に働くことをやめ、落ち着いた	考えたことがなかった(ない)	働かない	その他
n	全体	68	5	11	3	3	11	4	6	24	1	0		
	共働きである	53	5	9	2	2	10	3	5	17	0	0		
	父親(あるいは母親)のいずれかが一人が就労している	15	0	2	1	1	1	1	1	7	1	0		
	専業主婦(夫)がいる	10	0	1	1	1	1	0	1	4	1	0		
	誰も就労していない	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
	その他	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0		
横%	全体	100	7.4	②16.2	4.4	4.4	②16.2	5.9	8.8	①35.3	1.5	0.0		
	共働きである	100	9.4	17.0	3.8	3.8	18.9	5.7	9.4	32.1	0.0	0.0		
	父親(あるいは母親)のいずれかが一人が就労している	100	0.0	13.3	6.7	6.7	6.7	6.7	6.7	46.7	6.7	0.0		
	専業主婦(夫)がいる	100	0.0	10.0	10.0	10.0	10.0	0.0	10.0	40.0	10.0	0.0		
	誰も就労していない	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0		
	その他	100	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0		

(2) 考察

アンケート結果から、短期大学に入学する前と今とでは、大きく意識が変化し、キャリアデザイン I が学生の長期的視野に立ったキャリアデザインに変化をもたらしていることが明らかとなった。短期大学入学直後の1年生前期科目としてキャリアデザイン I を開講することにより、受講した学生らが自身の長期的視野に立ったキャリアデザインを意識したことは重要で有効であると考えられる。

「結婚や妊娠、出産に関わらず、働き続ける」と継続就労の意識が高まったことに加えて、「結婚を機に働くことをやめ、家庭に専念する」「妊娠・出産を機に働くことをやめ、家庭に専念する」これら専業主婦を希望することを示す2つのカテゴリーでも、入学前に比べてキャリアデザインI受講後「結婚を機に働くことをやめ、家庭に専念する」が11.8ポイント減少、「妊娠・出産を機に働くことをやめ、家庭に専念する」が13.3ポイントともに減少している。これは、キャリアデザインIの講義において、女性の就労が社会から求められていること、ライフプランやマネープランを考える際に必要となる様々なデータを示したことで、自身が就労する必要性を認識した結果であると考えられる。

また、身近なロールモデルである保護者の就労状況が学生の継続就労に対する意識に差異をもたらしていることも明らかとなった。

#### 4. おわりに

キャリア教育関連科目の一つ、キャリアデザインIが学生の長期的視野に立ったキャリアデザインに変化をもたらし、「結婚や妊娠、出産に関わらず、働き続ける」継続就労の意識が高まったのと同時に、結婚や妊娠、出産でいったん離職し再就労するケースでは、正社員ではなく短時間勤務できる職場で働くことを希望する学生比率が20.6ポイント増加した。これは、キャリアデザインIで、M字カーブの背景や、正社員として再就労する厳しさ、子育て世代の女性が直面している現在の就労状況を講義で伝えたことにより、学生が女性就労の厳しい現実を認識したために、正社員としての再就労を諦めたのではないかと推察する。現実を知ったうえで、結婚や妊娠、出産を機に離職し再就労を希望する学生が一定比率存在することからも、再就労しやすい制度の検討や支援、気運の醸成に向け国や地方自治体、事業所が取り組みを推進していくことは重要である。結婚や妊娠、出産でいったん離職したあとに再就労することを希望している学生が、正社員ではなく短時間勤務の形態を選択する傾向が強い結果となった原因を今後、明確にする必要がある。また、経済情勢などの外部環境が学生の就労意識に影響を与えている可能性もあるため、調査を継続すべきであると考えられる。さらに、身近なロールモデルが学生の継続就労に対する意識に差異をもたらすことが明らかとなったため、身近なロールモデルとは異なる就労形態のメリットやデメリットを考えたり、ワークとライフの調和の仕方が多様であることを理解する機会を学生に与えるにあたり、多様なロールモデルをどのような視点で選択し、就業前の学生に示すことが望ましいかについても今後、検討する必要がある。

#### (参考文献)

- ・ すべての女性が輝く社会づくり本部「すべての女性が輝く政策パッケージ」、平成26年10月10日、首相官邸ホームページ ([http://www.kantei.go.jp/jp/headline/brilliant\\_women/#c014](http://www.kantei.go.jp/jp/headline/brilliant_women/#c014)) .
- ・ すべての女性が輝く社会づくり本部「女性活躍加速のための重点方針2015」平成27年6月26日、首相官邸ホームページ ([http://www.kantei.go.jp/jp/headline/brilliant\\_women/#c015](http://www.kantei.go.jp/jp/headline/brilliant_women/#c015)) .